

2022年3月20日 礼拝説教要旨

詩編講解説教102「心挫けても」

詩編102：2～12、Iペトロ1：21～25

詩編第102編は「悔い改めの七つの詩編」の一つに数えられています。10節に「わたしはパンに代えて灰を食べ、飲み物には涙を混ぜた」とありますが、ここから教会は伝統的にレント（受難節）の始まる「灰の水曜日」に読んだと言われています。分類としては「嘆きの詩編」に分類されます。捕囚を解かれやっとの思いで自分たちの国に帰ってきた。そこには大きな喜びあるでしょうけれども、しかし一方で彼らが目にしたものはすっかり変わり果てた、荒廃した国の姿でありました。7節には「荒れ野」「廢墟」とありますが、そのように廢墟と化した街を目の当たりにして愕然とする様子が伺えます。ウクライナでの戦争をすぐに思いますが、たとえ戦争が終わったとしても、避難した人々が帰ってきてあの破壊され瓦礫と化した街を見た時にどう思うでしょうか。国を再建するのは容易なことではありません。この詩人もおそらくそういう状況だったと思われる。1節の表題には「祈り。心挫けて、主の御前に思いを注ぎ出す貧しい人の詩」とあります。「心挫ける」（アータフ）は、打ちひしがれる、活力を失うことを意味する言葉です。廢墟を前にして呆然とし、打ちひしがれてしまう。せっかく国に帰ってきてもお困難が山積していて心折れてしまうのです。

もう一つ、この詩編の背景には詩人の病いがあると考えられています。4～8節のところには病いの状態が詩的に表現されています。「骨は炉のように焼ける」（4節）これは病いの高熱に苦しむ様子です。「わたしはパンを食べることすら忘れた。わたしは呻き、骨は肉にすがりつき」（5～6節）これも病いゆえに食欲がなく、やせ衰えていく様子を表しています。「荒れ野のみみずく、廢墟のふくろう」（7節）みみずくやふくろうは、群れを作る習性はありません。これは病いの孤独を表していると言われます。病いの苦しみはその人にしかわかりません。どんなに痛み、苦しみを訴えても、誰かがそれを代わってあげることはできない。また病気をして、これまでしてきたことを止めたり、中断することで社会から切り離されたような感覚を抱くことがあるかもしれません。人はそこで深い孤独を味わいます。

そのような孤独をよく表しているのが8節の言葉です。「屋根の上にひとりいる鳥のようにわたしは目覚めている」（8節）マルチン・ルターはこの言葉についてこう説明します。「この詩人はこの世という家の中で眠ることもできず、まだ天に上ることもできず、信仰にあって独り宙に浮いている」と。「屋根の上にひとりいる鳥」という言葉でそういう人間の状態を表現するルターの感性に改めて驚きます。病いにあるとき、皆さんも経験があるかもしれませんが、起きていても寝ていても辛いことがあります。ゆっくり眠るというのは、健康体の人に言えることです。病の苦しみ、痛みゆえに眠るに眠られず、かといって死ぬのでもなく、ベッドの上で独り過ごす。この世にも、天にも居場所がない、独り宙に浮いた存在ということでしょうか。そのような孤独を感じたことがあるでしょうか。そして詩人は、自分の命が尽きて行くことを感じています。「わたしの生涯は移ろう影、草のように枯れて行く」（12節）同じような表現は4節にもあります。「わたしの生涯は煙となって消え去る」（4節）12節の「移ろう影」は直訳すると「影のように傾く」となります。夕暮れの影が長く傾く描写がここにあります。一日が終わろうとしている夕暮れ時、そこに人生の夕暮れ、儂く消えて行く命を表現しているのでしょう。こういう部分も非常に詩的な表現だと思いますが、でも死を間近に感じる時に、わたしたちはそういう心境になるのだと思います。

人生において心挫ける経験をいたします。病いを得て、あるいは年老いて命の尽きて行くことを日に日に感じる。それだけではありません。挫折や失敗をして、社会から、仲間から、家族から取り残され孤独に陥ることもある。1節の表題に「貧しい人の祈り」とあります。文字通り、この詩人はすべてを失う経験をしています。自分の中には何もない。命すら残されていない。ここには究極の貧しさがあると申し上げてよいでしょう。しかしこの詩人はその中で神さまに向かって祈ります。「主よ、わたしの祈りを聞いてください！」(2節)と。最後の最後でこの詩人は神さまに祈るのです。「苦難がわたしを襲う日に、御顔を隠すことなく、御耳を向け、あなたを呼ぶとき、急いで答えてください」(3節) どのような困難の中でも、すべてを失い絶望の淵に立たされても、これだけは失われないものがある。それは神さまに祈ることです。そこにはこれまでとは違う全く新しい世界が広がっている。信仰とはそういう世界のことです。

教会では「悔い改め」ということを言います。それは方向転換の意味ですが、少し考え方を変えろとか、習慣を改めろとか、祈る回数を増やすとかという次元の問題ではありません。それは徹底して自分に絶望し、この世に絶望して、ただ神さまにのみ望みを置くことです。神さまにしか望みがないことを知ることです。『ハイデルベルク信仰問答』は悔い改めについて、「古い人の死滅と新しい人の復活」と教えています(問88)。それは人をこれまでとは正反対の生き方へと導きます。この世ではなく、自分でもなく、ただ神さまにのみ望みを置く。そのような全く新しい人生がここに始まります。

そしてその悔い改めを可能にするのが神さまです。神さまはこの貧しきわたしたちの祈りをお聞きくださる。「急いで答えてください！」(3節) この訴えに応えられるのです。「主はすべてを喪失した者の祈りを顧み、その祈りを侮られませんでした」(18節)「主はその聖所、高い天から見渡し、大空から地上に目を注ぎ、捕らわれ人の呻きに耳を傾け、死に定められていた人々を解き放ってくださいました」(20～21節) この御言葉はまさにイエス・キリストによって成就いたしました。キリストは天から降ってこられ、そして罪に捕らわれ、死に捕らわれているわたしたちの祈りを聞き、十字架において人類のすべての罪と死を担ってくださいました。そして三日目によみがえられて、その罪と死に勝利されたのです。わたしたちは洗礼を受けて、このキリストに結ばれて新しい人としてよみがえるのです。真の悔い改めがここに起こります。

心挫けることがあって人生に絶望しても、主の御前にその嘆きを注ぎ出して祈る時に、わたしたちは全く新しい世界をそこに見るでしょう。十字架で死なれ、三日目によみがえられたキリストがその嘆きを担われ、わたしたちを新しい人として立ち上がらせてくださいます。この希望がわたしたちを最後のところで支えます。